

お名前 伊藤 俊男
ご住所 津市
発生時にいた場所 栗真町屋町 栗真小学校
当時の年齢 12 歳

太平洋戦争真只中で昭和 19 年 12 月ともなれば敗色濃厚な日本の日々、12 月 7 日といえば寒さが若干厳しいその頃小学校では午後の 1 限目の授業中であった。今の給食室の東側にあり、何の勉強をしたかはサッパリ覚えてないが突然天地がひっくり返るような振動で皆一斉に北側の窓から飛び下りて外に出た 5~6m 離れたところに幅 2m 位の溝川がありその溝を飛んだことは覚えているが奇妙にその飛んだ現象を今もはっきりと思い出す。幅 2m 位の溝であるので飛んだらすぐに向う岸につくのであるが、飛んでその中間空中で直角に直下に落下した。こんなことが起こるのが不思議な記憶としてはっきりと今も覚えている。人に言っても「そんなこと？」と言って相手にされない。家に帰るのに 1 km 道程何の記憶もない。誰に聞いたのか覚えていないが、「大きなすごい地震で四日市では石原産業の東洋一の煙突が折れたそうな」ということを耳にした。家の近くには昔からの伝統のある常夜燈が二つあり、これが 2 カ所共壊れた。家が壊れたとか塀が壊れたとかのことは一向に聞かない。何せ今と違って情報が皆無であり特に戦時中のこと。ただ、溝を飛んで真下に落ちたことが記憶として残っている。ただ、私の怖い記憶としては昭和 28 年の 13 号台風で堤防がほとんど壊れたことでの床上浸水と、七夕豪雨での浸水である。伊勢湾台風の被害は、こちらはたいしたことがなかった。

この現象はあとあとで思うのであるが、鈴鹿山脈方面にエアポケットといって飛行航路の危険個所とされているそうで、即ち詳しくはわからないが、真下に落ちたということは大きな地震で瞬間気圧が極端に上下変化をしたのではなかろうか？